



染められてしまった嫁

気づかなかった僕。



## INDEX

第一話	萌夏の変化	あなた視点	2	
第二話	九月	セクハラの季節	金田視点	31
第三話	十二月	調教の季節（1）	金田視点	42
第四話	十二月	調教の季節（2）	金田視点	54
第五話	三月	教育の季節（1）	金田視点	66
第六話	三月	教育の季節（2）	金田視点	78

## Character

☆桑原萌夏（くわはら ほのか）：二十一歳（新卒）：168cm  
真面目でさばさばしているけれども、同じく真面目な主人公のことを慕っている。犬タイプのヒロイン。主人公の近所に住んでいた縁で慕っている。高校・大学と2つ年下の主人公と後輩としてずっと追いかけてきた。



☆あなた（視聴者）：二十四歳（入社2年目）：170cm  
就活に失敗し、志望していなかった成功したベンチャー系企業に入るも、過労働の中に自分の居場所を見出す。少しでも成功するために、進んでサービス残業し、そのことを金田に見透かされている。

☆金田（ヒロインとあなたの会社の嫌な社長）：三十五歳：175cm  
遊び慣れていて世渡り上手、成金。主人公からは真面目じゃないと思われる。口だけ意識高い系。人を利用するのはうまく、こずるい。

## 第一話…萌夏の変化 …あなた視点

六月

僕が彼女に出会ったのはずっと小さなきだった。2つとなりにつ越してきた小さな女の子。小学生の僕は無邪気な好奇心から彼女に声をかけ、近所を案内した。しばらくして彼女は僕が通っていたそろばん教室に通うようになって、一緒に帰ることが増えた。

思春期になってお互いのことを意識してわざと無視し合ったりしたこともあった。それでも僕たちはお互いのことを完全に無視することができなかった。だって、彼女は僕のいる高校を選んでいたから。1歳年下の彼女にとって一緒に通える期間はたった1年でしかないというのに。でもだからこそ、僕たちはお互いのことを意識して、いつの間にかほんとうの意味で愛しく思い合うようになっていた。その一年が性を恥ずかしがる僕達の気持ちよりもずっとずっと愛おしかったから。

そして僕は東京の大学に入り、彼女は僕を追いかけて東京の大学に入ってきた。芯が強く優等生タイプなのに僕と二人の時だけは甘えてくれる優しい彼女。僕の大学に彼女が進学してきた日、入学式の直後、僕は彼女に告白した。長い長い恋愛の真似事を繰り返した後で、ぼくと萌夏は本当に彼氏と彼女になった。それでも僕達にあった時間はほんの〓年間だけ、〓年後に僕は就職した。第一希望の企業じゃなかったし、第二希望でも、第三希望でもなかった。落ち込んだ僕の肩を抱いて優しく慰めてくれた彼女。『あなたがいくところだったらどこだって私は行くわ』そう、たしかに彼女はささやいて僕を元気づけてくれた。僕たちはその時から同棲し始めた。

だから、僕は頑張つて働いた。彼女に恥ずかしくない男であるために。彼女が大学を卒業して同じ会社で働くときにきちんと教えられるように。正直に言つて僕は自分の会社があまり好きではなかった。誰も彼も不真面目で口だけで、隙があれば人に仕事を押し付けようとする。そんな会社を新人の僕が変えることはできないけれど、せめて先頭に立つて

背中で模範を見せて示すことはできると思った。だから僕はサービス残業もためらわずに受け入れた。全部愛する萌夏のために。

彼女が入社してくれば、すぐに結婚の話が出るだろう。結婚して、所帯を持ってきちんと男の責任を果たせるように準備しないと。そう思つて僕は働いてお金を貯めた。

彼女が会社面接に来た日。朝家を出る時にお互い肩を叩き合つて頑張ろうと言つた。彼女と僕の揺るぎない絆を感じて、そして優秀な彼女なら絶対にあんな会社を落ちることはないと確信しながら。

結果として当然のように彼女が就職した。彼女の配属された部署は僕の部署とはあんまり関係がなくて昼食の時ぐらしか会えなかったけれども僕たちは幸せだった。

そして9月。久しぶりに一緒に出かけた。久しぶりの連休に僕たちは実家に帰つて家の近所の公園で僕はプレゼントした。小学校の時に一緒に遊んだ公園だ。渡したのは精巧なイミテーションジュエリーの指輪と封筒。今はこれだけだけど、落ち着いたら本物のダイヤのエンゲージ

リングを用意して結婚式をあげよう。そう僕は言った。渡した封筒には  
いつていたのは記入済みで彼女が署名するだけの結婚届。

そして僕たちは夫婦になった。会社でのトラブルを避けるために社内では別姓のまままで通した。なんといつても彼女はまだ入って数ヶ月の新入社員なのだから余計な苦労はかけたくなかった。

## 七月

季節がすぎて夏が終わる。僕も彼女も真面目だったから朝早く家を出て、夜遅く帰った。忙しい日々埋もれながらもなんとか時間を作ってたまの休みには二人でちよつとしたデートにも行った。一緒に昼食を食べて一緒に通勤する幸せで穏やかな日々。

けれども、徐々に彼女の帰宅する時間が秋の初め頃からずれ始めた。まず、会社の営業などで取引先と食事にかなげなければいけないことが増え、それはすぐに週末も侵食した。彼女の帰宅はいつの間にか日付をまたいで酒臭い息をしながら帰ってくるのが普通になった。



そして彼女は秘書課に転属になった。給料は上がったし、昇進と言ってもいいと思う。祝福して近所の居酒屋で乾杯した。彼女の表情はどことなく浮かなかつたのは理解できた。社長の金田はどう考えても最低のやつだったからだ。たしかに僕達の働く会社を立ち上げたのは金田だ。だけどその時には資本金を用意した共同経営者がいたのだった。実際にはその共同経営者のノウハウと資本をつかって業務を拡大し、そして自分の息のかかった人間を大量に雇用して会社を乗っ取ったらしい。そしてそれとともに社名を金田コーポレーションとして全てを支配したという。

だが、金田のやっていることは人に業務の大半を押し付け失敗したら切り捨てるという過酷なやり方で、この方法なら金田本人は責任を取る必要のない卑怯な経営だ。しかも、僕が一番嫌いなのはカタカナ語を多用し大言壮語を撒き散らすくせに残業する人間を無能と見下す態度だ。だからそんなやつのおそばに萌夏が行くことは気持ちのいいことじゃなかったし、不安だった。それでも優秀で芯の強い彼女なら大丈夫だと

思っていた。ただ、今まで以上に一緒にいる時間が減ってしまうのだけが怖かった。

そして密かに僕よりも早く昇進した彼女への羨望と男としての自信喪失が伴ったことも言っておかなければいけないと思う。彼女との関係をフェアなものであり続けるために。

案の定、僕と彼女の会える時間は著しく減った。彼女は会社ではなく社長の自宅に迎えに行くことになって一緒に通勤できなくなった。そして昼食も金田のランチミーティングのために一緒に取れなくなってしまった。二月に入った頃から一緒の家で暮らしているはずなのに顔を見ることも珍しくなってしまった。実際、萌夏は社長に付き合っておりここに出張していたし、そうでなくても残業で会社の近くのビジネスホテルに泊まる事が増えているようだった。会社で時たま見かける彼女はいつも忙しそうで、声がかげづらかった。

僕たちは夫婦なのにまるで他人みたいな生活が始まった。まるで高校時代みたいにコミュニケーションの中心はメールだけで、しかもそれ

さえもお互い忙しすぎてまるで業務連絡みたいな簡潔なものになってしまった。これじゃあゆつくりとチャットで時間を共有できた高校時代の疑似恋愛以下だ。

十一月になって初めて夫婦の営みを萌夏に拒否されてしまった。彼女が忙しいことは知っていたから『疲れているからやめて、おねがい』と言われたときは仕方がないと諦めるしかなかった。今年のクリスマスは一緒に過ごすことができなさそうだなと寂しく思った。

冬が来た。高校から今まで冬がこんなに寒いと思ったことはなかった。いつも萌夏とつながっていると感じられたから。一人じゃないと感じられたから。でも今は夫婦として籍を一緒に入れているはずなのにそう感じられない。はじめは休み時間の度にやり取りしていたメールのやり取りさえいつの間にか半日に一通になって、一日一通になって、そして最近は数日置きになってしまっていた。しかも年末年始は金田社長の海外展開の事前調査に付き合ってしまったから一緒に実家に帰れないと言われてしまった。

## 十二月

そして年が明ける。一緒に実家に帰ってお雑煮を食べて、お屠蘇を飲んで、夫婦になった最初の正月を祝いたかった。それなのに萌夏はいなくて、完全にやる気を失った僕は寝正月を過ごした。彼女が横にいない正月なんて5年ぶりだった。

そんな正月のある日、僕達の共通の知人と話していた。その知人は萌夏が新しい会社に入って随分垢抜けたみたいだねと話していた。そんなはずがないと僕が言うとその時は僕の知らない彼女のSNSアカウントを紹介してくれた。忙しい彼女にSNSを更新する余裕などあるはずがない、だから彼女の殆どのSNSはこの半年間止まったままだった。

それなのにそのSNSは頻繁に更新されていて、しかもおよそ彼女らしくない雰囲気を出していた。僕はその知人に同姓同名の知人だろと言って一笑に付したが、内心では気が気でなかった。

そのアカウントは名前と会社以外の情報は全部伏せられていて、萌夏

だという確信は持てなかった。それでも萌夏でないという確信も持てなかった。気がつくとは僕はそのアカウントに頻繁にアクセスしていた。たぶんあんまりにも長い間、萌夏ときちんと喋れていなかったから気の迷いだろう。

そのSNSはごく最近開設されたもので履歴を遡っていくと6月に作られたものだとなった。

最初に思ったのは多分これは同姓同名の誰か別の人間のSNSだということだった。なぜなら、あまりのも普段の彼女の真面目な雰囲気とはかけ離れていたし、なんだか不まじめな臭がしたからだ。それなのに僕達の会社に言及されていて余計に困惑した。

kenaka kawakura - cont from Shinjuku

Sep. 20, 20XX 🧑

金田コーポレーションの桑原です。

今日からフェスチャははじめました。

いっぱい勉強しなきゃいけないけど、頑張ります👍！

今日は秘書課のみんなで転任祝いのランチを頂いちゃいました🍴🍴！



Like👍 Comment💬

👍❤️ Kaneda, Sato, Suzuki and 40 others

**Kaneda**

フェスチャはビジネス関係のヒューマネに必須だから、早く使い方を覚えてね。

オレのフォロワーをフォローするとイイ感じだと思うから、

ヨロシク！

Like • Reply

**Shimoda**

萌夏ちゃん、よろしくお願いします！一緒に会社を盛り上げよ～！

そして読み進めていくとこの人物はあまり真面目に仕事をしているように見えないと感じてしまう。昼間っから社外でお茶をしたり、まるで学生気分が抜け切れていないのに大人を気取っているようなアンバランスな印象を受けて気分が悪くなる。それなのに、オレはそれを見るのを止めることができなかった。

Honoka Kuwahara sent from Shibuya

Oct. 14. 20XX 🧑

今日は渋谷のカフェ🍷でお仕事の続きをしています。

近く誰かいましたら一緒にプレゼン準備手伝ってくれると嬉しいかもで❤️



Like 🍷 Comment 💬

🍷❤ Kaneda, Sato, Suzuki and 38 others

Kaneda

お疲れ様です。

オレもそっちのほうにいるのでお手伝いしに行きますね。萌夏ちゃん

なら大丈夫です▶

Like • Reply

Shimoda

金田社長と一緒にお手伝いに行きますね！



ほぼ数日置きに自分の人生がいかに素晴らしいものかを誇示するかのように投稿されている写真の数々。でも、どの投稿もこの手の意識高い系の人間にありがちなコメントで埋められていて萌夏の個性がどこにも見当たらない。そもそも彼女はこんなふうに投稿するタイプの人間ではないはずなのだけど。

Honoka Kuwahara sent from Ginza

Oct. 21 . 20XX 👤

似合ってるかな？ちょっと不安かもです。

でも社長さんに頑張ってるからってプレゼント💎されちゃったから皆さんに報告しないと思って(笑)

この前の案件のご褒美みたいです😊

その節はいろいろとご迷惑をかけちゃいましたがなんとか成功させられました！ありがとうございます😊



Like 👍 Comment 💬

👍❤️ Kaneda, Sato, Suzuki and others


**Kaneda**

似合っているとよ。気に入ってくれたみたいで良かった。  
とりあえずは、お疲れ！これからのことは次のミーティングのアジェンダにするから楽しみにしててよ

Like • Reply

**Shimoda**

アレのことは気にしないで。大丈夫私達みんなでサポートするから！

そしていつの頃からかその  に投稿される文面には単なるビジネスや仕事を超えた人間関係、それも男の匂いが始めていた。萌夏のこ  
とではないと頭では理解しているのだが、その投稿の一つ一つが僕の感  
情を刺激して疑念を深めていく。自分の妻を、それも正月さえ働いてい  
る一生懸命で真面目な妻を信じなければいけないという気持ちだが、こん  
などこの誰ともわからない安っぽい赤の他人の投稿で揺らいでいいは  
ずがないのに…。

Honoka Kuwahara sent from Yoyogi

Oct. 31. 20XX 📍

今日は金田社長さんと一緒にアジアンなランチをいただきました🍴

スパイシーだったけど、とっても刺激的でした❤️

別のカルチャーにふれるのってクリエイティブセンスを刺激されて嬉しい体験でした！



Like 👍 Comment 💬

👍❤️ Kaneda, Sato, Suzuki and 40 others

**Kaneda**

おいしかった？

次のプロジェクトのためのインスピレーションが得られたらいいね。

また食事に行きましょう

Like • Reply

苛立たしいほどに不自然なカタカナ語のオンパレード。それが彼女を浮ついた表層的な人間だと見せつけてくる。僕が苦手ないタプの口だけの無個性で不真面目なタイプ。それなのに彼女の人生は誇示するためだとわかつているにも関わらず、楽しそうで、そして所々にそこはかとな  
い不実さが感じられた。

Honoka Kuwahara sent from Izu

Nov. 3. 20XX 🗓️

今日は日曜日ですが、取引先のMさんに誘われて社長さんと一緒にゴルフを楽しませてもらいました 🏌️🏌️。楽しかったです。

ちょっとゴルフウェアは肌寒かったけど、久しぶりに体を動かして、すごいリフレッシュできました 🍷🌞。



Like 👍 Comment 💬

👍❤️ Kaneda, Sato, Suzuki and 23 others

Kaneda

萌夏ちゃんのゴルフウェア可愛かったよ。汗を流したあとの飲み会も楽しかったしね。また行こう！

Like • Reply

Shimoda

途中で雨が降って服が透けちゃったときはハラハラしたけど、楽しか

これは絶対萌夏ではない。僕の知っている彼女はこんな浮ついて不真面目で表層的な人間ではない。今もきつと仕事を頑張っているに違いない。それなのに心のなかではぼくは彼女のことを完全に信じきれなくなりつつあった。たった数十枚のΣΣの投稿、ソレが僕と彼女の絆を揺るがせてしまう。それほどまでにこの半年の忙しさは僕と彼女を切り離してしまっていた。

Honoka Kuwahara sent from Akasaka

Nov. 20 . 20XX 🧑

いつもお世話になっている取引先のS部長にピアス頂いちゃいました♥

こんなプレゼント🎁びっくりです。赤くてすごくかわいくて嬉しいのでここで報告させていただきます。

それからもちろん、S部長さん、ありがとうございます！♥



Like 👍 Comment 💬

👍♥ Kaneda, Sato, Suzuki and 18 others

Kaneda

よかったじゃん。オレも萌夏がベターなリレーションシップをS部長と作ってくれて嬉しいよ！その調子で愛想よく、キミのキャラクターを活かしてね

Like • Reply

Shimoda

S部長ってウチの業界の大物だよ！



その僕の知らない萌夏という人物の投稿頻度は徐々に増えていって、投稿すればするほど反響も増えていっている気がした。あちこちからプレゼントも受け取っているらしく、初めは仕事のことが中心だった投稿は少しづつ化粧やファッションなど女性らしい方向にシフトしていつているように見えた。それなのに、彼女の投稿につくコメントの大半が男からのもので、彼女の交友関係がどんなに歪んでいるものなのかを察せられた。

Honoka Kuwahara sent from Odaiba

Dec. 24. 20XX 🧑

メリー・クリスマス 🎄

金田さんがあげちゃえって言うから特別にあげます。金田さんエッチすぎですよ～、でもクリスマスだしみなさんもお楽しみな  
んですよね👧👦💕

今日は朝から大忙しでした(笑)



Like 👍 Comment 💬

👍❤️ Kaneda, Sato, Suzuki and 153 others

**Kaneda**

プレゼントしたブラめちゃくちゃセクシーでキュートじゃん。オレのクリスマスプレゼントもちゃんと発表しなきゃね。あとで萌夏のくれたネクタイピンつけてみるから楽しみにしててな❤️

Like • Reply

**Shimoda**

も一金田さんったら。あんまり萌夏ちゃんにむちゃぶりしちゃ

そしてクリスマス。僕が残業して、萌夏もやはり忙しくてそんなイベントどころではなかった日。妻と同姓同名の彼女は別お意味で忙しかったのだとまるで見せつけるように上司から与えられた下着の写真をアップロードしていた。僕は一昨年のクリスマスに彼女から貰ったネクタイピンを思わず思い出した。

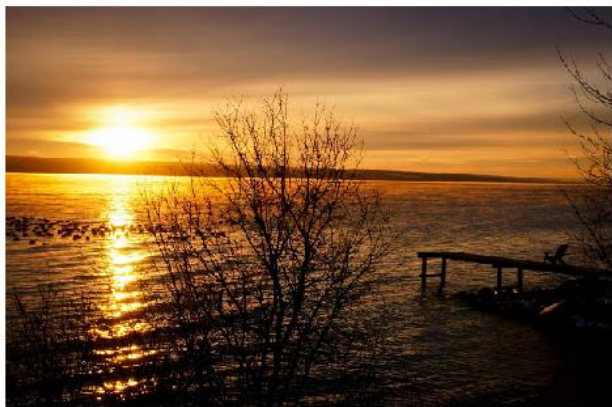
Honoka Kuwahara sent from Jeju Island

Jan. 01. 20XX 🧑

秘書課のみなさんと金田社長さんと一緒に日の出🌅です。

この1年、すごく成長できた気がします。ほんとうに皆様ありがとうございます。

新しい年🌱も皆様にかわいがってもらえると嬉しいです❤️



Like 👍 Comment 💬

👍❤️ Kaneda, Sato, Suzuki and 33 others

Kaneda

萌夏ちゃんの成長にコミットできてオレも嬉しいよ。

後でみんな一緒に特別セミナーがあるから期待していいよ❤️

Like • Reply

Shimoda

萌夏もすっかり私達の会社の色に染まったよね。これから

そしてこのSNSの中の『萌夏』も正月返上で社長の出張に付き合っているようだった…。彼女とその上司であるあの不真面目な社長との中はとても良いようで、同僚との会話も節々に中の良さがにじみ出てくる。普段仕事で忙殺されてしまっている僕には彼らが同じ会社の人間だということが信じられなかった。

Honoka Kuwahara sent from Kyoto

Feb. 3. 20XX 🧑

今日も社長さんに付き添って出張です。京都なう🎵。

もうすぐここに来て1年か、色々あったけど成長できた🌱気がするかな  
ぜんぶ金田社長のおかげだな~って最近思っています❤️



Like 👍 Comment 💬

👍❤️ Kaneda, Sato, Suzuki and 55 others

Kaneda

オレのほうこそ、いつも萌夏にお世話になってるからね、ありがとう。そしてこれからもがんばって！

Like • Reply

Shimoda

感謝の気持ちをお忘れしないのは大切だよ。特に萌夏は金田さんのお気

完全に心酔してしまっていることが明らかかな投稿達。それでも僕は信じられなかった。と言うより信じたくなかった。全てを忘れるために僕は明日からの業務スケジュールを復習し、より深く仕事に打ち込んでいった。全ての不都合な真実を頭の奥深くから消し去るために。

そして六月。今日は僕達が婚約した日だった。それなのに、僕は上の方から押し付けられた業務で押しつぶされそうになって息も絶え絶えで残業していた。

僕がパソコンの前で集中しているとコトリと隣で音がした。振り向くと萌夏がそこにいた。正直夢ではないかと思った。ああ、やっぱり彼女も覚えていたんだと安堵した。なんだか僕の知っている彼女と雰囲気微妙に違う気がしたけど、あまりにも長い間ゆっくりと彼女のことを見る機会がなかったので確信が持てなかった。それにもしたら結婚一周年記念日だから気合を入れているのかもしれないから。

僕は軽くお礼を言って渡されたお茶を一口飲んで口を開く。

「ああ、萌夏……」

僕は彼女にかける言葉も忘れてしまっていた。

気まずい沈黙。その沈黙がこの一年、彼女と結婚してからどれほど僕達が離れてしまっていたかを示してしまっている気がした。

「今日も残業してるかなって、お疲れ様」



そう言ってゆっくり萌夏が微笑んだ。ああ、僕の知っている彼女だ。そう思った瞬間視界ぐらりと揺れた。

第二話..九月　セクハラの季節　..金田視点

桑原萌夏は、はじめは嫌がつていた。だが、思った通りチョロかったといえはチョロかった。面接でひと目見たときからこの生意気なオンナが望んでいるのは地位と尽くす相手だとわかつていた。

まず、最初にやったことは桑原の旦那の業務を増やすことだった。就職してすぐ結婚したと言うのは人事を通じて話がいっていた。いくら職場で別姓を使っても社長のオレには筒抜けつてわけだ。適当にどうでもいい雑用を大量に萌夏の旦那に押し付ける。まあ、もともと残業をいとわない社畜タイプだし、便利なやつだったから今回も文句も言わずに自分の時間をオレにくれたつてわけだ。

そして旦那が自分の時間をオレの会社に捧げている間にオレは萌夏に近づいた。面接でコイツが旦那に尽くしていてそのためにウチに就職したことまでわかつてるわけだからあとは旦那の昇進の話をせせば簡

単に動かせた。

はじめは社内の連絡係としてオレのところによく呼び出して、それから旦那の案件を影からサポートするための接待の『同伴』として指名した。旦那の業績評価を上げてやると言って何度かパートナーカンパニーへのミーティングに同行させてやった。ウチの業界のそこそ有名な取引先に引き合わせてやって、うまい飯でも食わせてやればだんだん接待要因にされることにクレームを付けてくることもなくなった。

そして接待の後は打ち合わせだとか適当に理由をつけてプライベートトミーティングをセッティングしてやった。もちろん仕事の話もするぜ。でも、二人だけでねつとりあの巨乳を揉みながらだ。最初にやったときは旦那が失敗した取引先へ謝罪に行った後だっけな。社長、自ら謝罪に行くって言ったら萌夏のやつ感動してたっけな。まあ、オレは口だけで謝罪するのとか別になんとも思っていないし、そのあとのプライベートミーティングで旦那のために謝罪させちまった罪悪感と旦那の業績評価を傷つけない一心から抵抗もなくオレに胸を揉ましてくれたぜ。あ

あ、今からは想像もつかないうぶな反応だったぜ。

「社長、何をするんですか」

「何って萌夏のプライベートミーティングだよ。ほら、そんなにカワイイからさオレももっと仲良くなりたくなっちまったってわけだ」

「やめてください！」

「もっと抵抗してもいいんだぜ。萌夏のそのブリプルあいた唇だってかわいくてしかたないんだから」

そう言いながら壁際に押し付けて壁ドンの体勢で見つめてやる。もう密着して逃げ場がない状況で褒めまくってやる。

「ほら、もっと怒ってもいいよ。怒った萌夏の顔もいかにもクールビューティでそそられるんだから」

「社長、これはセクハラですよ」

「だからどうするのさ。キミにこのケースでできることはないんだよ。警察に行ったらキミ達は夫婦でクビだからね。それにせっかくキミの旦那さんの損失を埋めるためにオレがわざわざ謝りに行ってあげたんだ

よ。妻としてどうすればいいかわかるよね」

そのあとはたっぷりあの豊満なデカ乳をたっぷり褒めながらいじってやったぜ。乳首がコリコリになって腰が揺れ始めるまでね。

「悪いようにはしないって。ちゃんと萌夏にもベネフィットは用意するし、すこしの間このめちやくちやキュートなバストを触らせてくれればいいだけなんだから。こんなにかワイイの胸をもってるのって萌夏だけだし。肌もすべすべですごい匂いにするぜ」

基本的に褒められて嫌な気分になるメスはいない。堕ちるまではまかせだろうがなんだろうが褒め続けるのがオレの流儀だ。褒め殺しつてやつかな。つけど、注意しなきゃいけないのは褒めるのは絶対に体と能力だけにすることってことだ。個性とかキャラクターとか、そういう面倒くさくてオレに刃向かう部分は絶対に褒めちゃいけない。

「今日の取引先に萌夏が出てくれた提案だけどさ、あれめちやくちやタイミング良かったよ。キミはほんつとビジネスのタレントがあると思うんだよね」

「ああつ、何を急に」

「急につてこれはミーティンなんだから今日のレビューするのは当たり前つしよ。あつ、乳首立つてきたねブラの上からでもわかるぜ」

エロいことをしながら仕事の話を振つてやる。これを繰り返すことでだんだん仕事とプライベートの区別が曖昧になっていくし、そしたら生活の中で比重の大きい業務の方に全部が引きずられてくのも論理的帰結つてやつだ。まあ、この時点では性的なことを仕事の一部にはしないつう常識があつたわけだけどね。

それ以降も接待の度にプライベートミーティングをセッティングしてその度に適当なプレゼントや簡単に成功できる案件何かを餌に黙らせてやつたつてわけだ。もちろんミーティングだからちゃんとおれの交渉テクも手取り足取り指導してやるわけだが。

たとえば、もうほとんど抵抗しなくなった『回目ぐらいだったかな。』「山田物産の社長だけどさあ、もつと強気に言つてもいいんじゃない」

「そつ、それは…どういふことですかあ…ああっん！」

「あそこはパートナーが業績悪化してつからなつけ込みやすいわけよ。」

ホラ、もつとケツつき出せ」

すっかり言いなりになっちまってよ。尻を突き出してくるもんだから、オレとしてもチンコこすりつけるしかないじゃん。あいつもオレのデカチンコ、ケツで感じながらまんざらじゃないみたいだったしな。

「ほらっ、オレが萌夏を責めるぐらいガンガン足元見てつけ込んでいっちまっていいってことだよ。ほら、お前の足元見てみろよ。ラブジュース垂れてるぜ」

「ああんっ、そんなあ。それは社長が指を入れてくるから」

「おいおい、この前言ったろ。オレのことはプレイベートミーティングでは『金田さん』だろ。ほらっ言うまでウリウリしちゃうぜえ」

そう言ってクリトリスに軽く爪を立ててやる。こここのところの『プレイベートミーティング』ですっかり萌夏の弱点はわかつちまったからな。

「ああんっ！」

社長室に萌夏の声が響く。オレはかなり前かがみになっている萌夏の手を取って、オレの股間に誘導してやる。

「ほら、責める練習だ、トライアルだぜ。どれくらいきつく締め上げればいいか教えてやっから、オレのペニス責めてみるよ」

一瞬、萌夏が困ったように止まる。もちろんオレはそこで考えさせる余裕なんか与えてやらない。このタイミングでブラウスの中に腕を突っ込んでブラ越しに乳首をグリグリといじってやる。

「ああんっ、ダメです！」

そう言うが快感の反応として彼女の手がオレのモノをズボンの上から握る。

「ホラ、もつと強く。我が社の利益のためだぜ。プロフィットを出せ！」  
耳元でささやきながら右手で乳首を左手でグシグシに濡れたマスコを愛撫してやる。まっ、これでも出てくるのはプロフィットってかザーメンなんだがな。



「いやですうん！金田さんっ…っはあっ！」

そう言いながらも彼女の白い指先は徐々に強くオレのチンポを服の上から弄り軽く勃起したその部分を掴んでさわさわとなでくる。彼女の指の強さに比例させてオレの愛撫を強くしてやる。口では嫌がりながらも既に萌夏の体はオレの愛撫を求めている。無意識的に揺れている腰、オレに抱かれやすい体勢を取ってしまっている胸。体の方はもうオレに愛撫されることに慣れて、更に貪欲に快感を求めてしまっているのが明らかだ。

オレはその時点で、一度萌夏の胸から手を離し、自らの勃起したチンコを露出する。オレの手に導かれるままに萌夏の術すべての手がそれを握る。

「ほら、旦那にやるみたいにしこしこしてみろよ」

そう言いながら再び乳首を責める。今度はブラの上からじゃなくてブラの中に手を突っ込んで乳首を思いっきりつまんでやる。

「あああん、あの人にはそんなのしたことお…んっ、ないです！」

おいしい、旦那のは握ったことないのかよ。こういうアホなピュアガール大すぎだぜ、オレ好みにくらでも変えられっからな。

「っじゃあ、会社のことを思ってくれよ。オマエが握ってるのは次回  
の契約だぜ。ホラ強く握って話すなよ。少しでも強く握ってたくさん金  
を吐き出させるん」

「あああん！そんなのお、わけがあつ…わからないです…んん！」

オレの手のひらで悶ながら、萌夏がそう言う。だが、そう言いなが  
ら彼女の指はガッチリ旦那のものではないチンコを握ってゆっくりと  
上下にしごいていた。

「ほらっ、もつと強くていいぜ。カウパー液が出てきたらソレがエビ  
デンスだ。もつともつと攻めてやれ。お前の覚悟を見せてみろよ」

ニチャニチャと徐々に彼女の指がオレの先走り汁で汚れ粘ついた音  
を立て始める。

「ホラッうまいぜ。これはビジネス。そうだろ、もつとうまくデー  
ルできるようにオレのペニスを握って離すな」

「はあつ、これがあビジネスう。ディール…」

トロンとしながら彼女が言う。だが、もう彼女の指は迷いなくオレのものをしごき立てていた。旦那のものも手コキしたことがないと言っていたのにビジネスと言ってやればこのとおりだ。マジ新入社員ちよろいわ。

そう思いながら彼女と密着し抱きしめてお互いの性感帯を刺激し合う。

「そうだ、うまいぞ、萌夏。ディールの才能があるぞ。もっと頑張れ」

「はあっん…ああん、ディールのお…才能がある…はあん」

まっ実際はディールってかただの手コキだけだな。萌夏の耳元で彼女の自尊心を刺激しながらその秘所に指を入れてクチヨクチヨかき混ぜる。

「おお、取引成立だあ…んんああ」

「はあああああんっ、わ、私もですう！金田さあん」

彼女の手首に向かってビュルビュルビュルつとオレのザーメンをか

ける。同時に彼女自身も絶頂し、オレの手に向かってピュッピュッと潮を吹く。

そのまま抱き合いながらお互いの息を整える。

「よかったぞ、萌夏。これで契約も取れる。間違いない。記念撮影しようか。萌夏がオレとディールの特訓したエビデンスにね」

そういつて彼女のザーメンに濡れた左手をラブジュースで濡れたオレの左手で取り上げで指を絡めて、自撮りする。カシヤリとスマホが音を立てて彼女が旦那ともしたことがなかったプレイの様子を切り取る。その後、オレはエルメスのハンカチで彼女の手についたザーメンを丁寧に拭いてやって、それからオレのチンポを磨いてチンカスまみれにする。ドロドロになっラゲジュアリーブランドのハンカチにシャネルの香水をふりかけて匂いだけごまかして萌夏に押し付ける。

「じゃあ、次の取引は萌夏中心でやるからヨロシクね」

もちろん、その取引のときも後ろから相手先に手を回して成功したように見せかけてやった。何も知らない萌夏は無邪気に喜んでオレのチン

コをまたシコシコしてくれたってわけだ。

第三話..十二月 調教の季節（1） ..金田視点

他には相手先のおっさんの目が完全に萌夏の胸をロックオンしてたこともあったっけな。まっ、あのデカ乳だ。しゃーない。っで、オレはプライベートルミーティングで教えてやったわけよ。

「今日のハゲオヤジ、ずっとお前の胸を見てたな。どうだった」  
もちろん胸をわっしやわっしや思うがままに揉みながらな。

「正直、気持ち悪かったです..あはっんん！」

「こんな敏感なのにな。次会うときはジャケットは無しで黒のブラを透けさせる。そしたら話が入りやすいからな」

「んん..そんな。いやですうっん！」

「お前女だろ。使える武器は使えよ、オラ社長命令だ」

「ああん！そ、そんなあ」

この時にはもうオレに抵抗する気はなくなつてたつぽくて素直に言うことを聞いてくれて契約が取れてみんなハッピーだったわけだ。それ以降、オレがセクシーなの着て来いつたらちやーんとエロエロなのを着てくるようになったぜ。多分、旦那の前でもしたことないようなやつ。まっ、本人が気がついてないのは萌夏もオレの『使える武器』、便利な道具の一つでしかないってことだったわけだけだな。

そんな感じに『新人教育』しながら社長室秘書にしてやたつてわけだ。もう、会社にいる時間の半分は以上はオレと同じ部屋だ。残業で帰れない旦那と一緒にいる時間はせいぜい1時間つとこだが、秘書の萌夏がオレの部屋にいる時間は、∞時間。その上ランチやディナーにも連れて行ってやつてる。

ちなみにここまでダシにされてる旦那だが、業績評価を上げてやるわけがない。あげるふりをして見せて、こんなに上げてやつてもダメダメ

なお前の旦那マジ無能って優しく萌夏に囁いてやる。はじめはいちいち反論してたけど、最近は何も言わなくなつた。旦那がダメなエビデンスが多すぎて反論できなくなつちまつたかな。まあ、そのエビデンスは全部旦那の実際の能力とは全然関係ないんだけどおバカな萌夏が気がつくはずはない。

そこでもっともつとオレに対するインセンティブを上げてやる。仕事用として萌夏に林檎のデザインで有名なおしゃれなコンピュータを買ってやって業界の人間とつながるための SNS の使い方を教えてやる。SNS のフォロワーがどんどん増えてオレへの高感度が目に見えて上がっていく。まっ、そのフォロワーの大半はオレが後ろで手を回して金で買ったアカウントなんだけどな。

次は萌夏の意識改革だ。社是の通りイノベーションを萌夏に起こして、オレの好みに書き換えるってわけだ。はじめはとある有名な業界人の有料勉強会に行かせるところから始める。そして社長秘書として簡単なスモールプロジェクトに出向させて、適当に活躍させる。そしてそれを褒

めまくって給料も上げてやる。

外から見ればイケイケのOLってわけだし、本人的にも全部うまくいっていて自信が出てくるってわけだ。まー、全部オレがお膳立てしてんだから当然なわけだが。そしてそのあたりで少しトラブルを用意してやる。めちやくちや落ち込む系のやつ。当然、外からのイメージを守りたい萌夏は外部の人間に相談できない、しかも旦那は相変わらず忙しくて話す時間もない。まっ、この時点でもすでに旦那の能力には見切りをつけてたかもしれない。まっ、つーわけで萌夏が頼れるのは毎日社長室で顔を合わせる超有能なオレだけってわけだ。

落ち込んでる萌夏を気晴らしに高級ホテルに誘ったらホイホイついてきちまって笑えたぜ。フレンチを食いながらロジカルなソリリュションを提示してやったら、まるで天のお告げでも聞くみたいに真剣な顔してメモとってんの。

もちろんその後はホテルでしっぽり熱い一晚を過ごしたってわけだ。旦那のことなんて全く頭になかったと思うぜ。浮気させちまったお詫び



につつってダイヤのネックレスをやったら一瞬『浮気』って言葉に納得  
いってなかったし。

「え、ああ。そうですね。浮気しちゃったんだ、私」

ってまるでそこで初めて浮気したことを自覚したみたいなことを言う  
もんだからオレは笑いをこらえながら言ってやったんだ。

「萌夏の辛い時に横にいられるのがオレでよかった。萌夏のモチベーシ  
ョンをあげられるんだったら何だってするのがプレゼントとしての  
オレの勤めだから」

そしたら、萌夏のやつマジマジとオレのことを見てそのままキスして  
きやがった。浮気だってわかった上でだぜ。

それ以降萌夏の化粧に気合が入り始めたから、あとは簡単だったぜ。  
ちよつとオレ好みの服をプレゼントしたら喜んで着るようになった。は  
じめはブランド物のバッグからスーツ、そして下着まで。下着プレゼン  
トしたら、意味はもう分かるじゃん。でも全然拒否らねーの。

その頃にはどんなにセクハラしても嫌がらなくなつて、むしろとろん

とした目でオレのを見てくるし、会社の接待に行った日はホテルに二人で止まるのが普通になっちまったぜ。

笑えるのは旦那が自分がサビ残で家に帰れてないから萌夏も同じだと思つて疑いもしなかったことだ。スーツが代わつて、オレのプレゼントしたアクセをつけてんのかな。まっ、平の社員じゃ社長秘書サマと会うこともそんなないから当然か。オレも確信が持てるまでは二人をセパレートしておきたかったしね。

「金田さん、今日もこの後ミーティングいいですか？」

そう萌夏の方から聞いてくる。

「ああ、いいぜ。どこでやる？」

「ふふ、どこでもいいです。金田さんのコンサルテーションを受けれるなら」

「じゃあ、今日は早く上がつてオレのうちに来るかい」

「ええ、よろしいのですか？」

「優秀な社員と個人的に付き合うのはプレジデントとして当然だよ」

そうケツをもみながら言つてやる。普通の状況ならまずセクハラ案件だが、萌夏はその段階までは既に教育済みだ。

「ではお言葉に甘えさせていただきます！っああん！」

そう言つてしなだれかかってくる。オレはそんな萌夏のケツを支えながら駐車場のベンツに向かう。外車に載ったことがないという萌夏を連れて一通りドライブに連れてつてやる。そして夕食を作ってくれとオレの好物の『お願い』してやる。まっ、今後オレの身の回りの世話をすることになるんだから早めにしつけないかなきゃね。旦那の色はさっさと脱色して萌夏をオレの色に染め直してやらないと。

他の秘書がおいでいったエプロンを使わせる。萌夏の雰囲気とは真逆のフェミニンなやつだ。そんなものがどうしてあるのか彼女は訝しんでいたが、社長命令で普通にスーツの上から来て調理していた。そしていま、夜景の見えるオレのタワーマンシヨンの最上階のリビングで食べながら彼女の愚痴を聞いてやる。大抵は取引先への不満だ。

「本当にあそのこの社長って横柄で傲慢で最低ですよ。まず、一緒に

やろうっていうパートナーマインドが全然感じられませんか。あそこ以外に選択肢がないから仕方なくつきやってあげてただけなのに……」

オレの意見を代弁してくれる萌夏に満足感を覚える。うんうんと適当に相槌を打ちながら彼女の背後から服のボタンを外していく。抵抗する気配は当然ない。彼女の黒いオープンブラがあらわになる。オンナとしての肉感を武器にするように指導して以来、彼女は自分で海外の高級セクシーランジェリーを買うようになった。黒いオープンブラの先端から飛び出た乳首が既に彼女が興奮していることを示している。そして下着姿になった萌夏に命令する。

「今日はまず口でやってくれないかな。指導されるものとして準備するのは当然の礼儀だと思っただけ」

「もちろんです。では金田さん今日のレクチャーの準備を私のお口でなさってください」

下着姿の萌夏が丁寧に着衣のオレのズボンのチャックを下ろし、その白い指で丁寧にオレのものを出す。

「右手で調整しながら左手で金玉をマッサージしな。ペロペロは丁寧に上の方から愛情を込めてな」

チュチュっとオレの指導に従って萌夏の舌が恐る恐る亀頭に乗っかる。

「ほら、キスをする容量で吸うんだ。オレからビジネスの知識をいっぱい吸収したいんだろ。どれくらい吸いたいのか見せてみるよ」

チュウウウウツツと強く吸われる。そのまま

尿道に萌夏の舌が差し込まれオレの小便で汚れた穴をメロペロする。いい傾向だ。入社したての頃は愚か、ほんのひと月前でもここまでではなかっただろう。どんどん彼女の中でオレの存在が大きくなっている証だ。そのまま彼女の中でオレの存在が彼女自身より大きくなるまでちゃんとして教育してやらなきゃな。

そう考えながら、萌夏の頭を撫でる。

「黒髪も陰気だし、もうすこし明るめに髪染めたらどうだ。接待にも花になると思うんだけどね」

「ふあ、しよ、しよれは…」

オレのチンポから口を話さずに口ごもる萌夏。あーあ、これはいけない。まったく許せない。ぐいっと頭を掴んでチンポから離す。

「萌夏、オレはな、お願いしているわけじゃないんだよ。前にいったろ、社長の言葉はなんだっけ？」

オレを見上げる萌夏の表情が悲しげに変わる。自分のミスがわかったんだろう。すでに彼女は引くにはあまりにも色々なものをオレに与えすぎた。すでに旦那と同じ程度にはオレのことを思ってしまったている。そんな相手から直接拒絶の言葉を聞きたくはないのだ。

「社長のお言葉はすべて命令です。プレジデントのオーダーはカスタマーやメンバーや私自身よりも優先…されます」

最後少し口ごもったな、コイツ。もっと責めるか

「じゃあ、論理的に染めない理由を説明してみてよ。少し髪を染めるくらいのことでは会社の利益が上がるんならむしろ自分から染めますって提案するぐらいがクリエイティブな社員の行動だと思っただけだな、オ

レは」

実際問題こんなの気持ちの問題で会社がどうのこうのの話ではない。だが萌夏はもうそんなふうに考えられないだろう。なぜならすっかり彼女のプライベートも内面も会社に依存してしまっているから。オレが依存するようにさせてきたからだ。休日まで含めて会社の業務をさせて、喜びも悲しみも会社と一体化させる。オレの好みの衣類や種類のフォーマットを強制し、それを彼女自身の好みとすり替えさせる。オレがこう感じろといったことは彼女の感情にならなくてはいけないんだ。

「すみません。そうですね。社員として社長の指示に違うのは当然のことなのに、私ったらなんで嫌だと思ったんでしょうか」

「そうそう、あとでちゃんんと萌夏に似合う染料を選んでやっからなあと、きちんと染められたら新しい髪の色に似合う髪留めを銀座のジュエリーショップに選びに行こうか」

「金田さん、ありがとうございます！」

すぐに萌夏がいつもの表情に戻る。自分の意志が捻じ曲げられたことな

どなかったように。

「萌夏、これだけは覚えとけよ。オレに対してできないというのは基本的にすべて言い訳なんだ。まず、拒否する前にやってみろ。やりもする前から否定するな。ポジティブマインドだ。今までだってオレの言うことは全部正しかったろ。ほらわかったら、続きだ」

こくんと笑顔で頷いて萌夏が再びオレのチンポにキスをする。



第四話..十二月 調教の季節(二) ..金田視点

チュチュ…ちゅぷっ…ぺろぺろと水音がする。萌夏が一生懸命オレのチンポに舌を這わせて奉仕しているのだ。旦那は時間的にまだサビ残をしている頃だろう。妻が社長の自宅でフェラをしているとも知らずに。「じゃあ、まずさつき行つたことの実習だ。これから、萌夏がどれだけの会社のために、オレのために耐えられるか試すからな。これをクリアできるタフな社員はあんまりいないが、オレは萌夏だったらできる思つてゐる」

「ハイ！ありがとうございます。頑張ります！」

何をするかも知かずに萌夏がそういう。こういうのがオレの理想のメス社員だ。オレはそのまま萌夏の頭をつかむと一思いにオレのチンポをその口に突っ込んだ。喉奥にゴリゴリとオレのチンポを押し込んでグリグリと萌夏の喉が反射的に痙攣して拒否しようとしてピクピクと亀頭

の先を刺激する感触を楽しむ。

そこらの風俗嬢だってこんなに無理やりやれば嫌がつて拒否しようとするもんだらう。だが萌夏は懸命にオレのデカイものを受け入れ続けようとする。健気にもなんとか耐えようと涙とよだれで整っていた化粧をグチャグチャにしながらも一生懸命オレのことを受け入れようとする。

そんな顔を見たらますますオレが高ぶってもつと使いたくなると思ってもせずに。オレはそんな健気にすべてを捧げてくれる女子社員への教育に満足しながらガンガンつと遠慮なく突き上げていく。もうオレにこいつは十分依存しちまっている遠慮は必要ない。会社の備品と同じ消耗品だ。

そのまま喉奥にゴリゴリオレの排泄器官を押し付けてビュルビュルつと射精する。もちろんオレのザーメンを吐き出したりしないように頭を押し付けながらだ。そして数秒に渡る射精の後にやっと離してやる。

「んぐほおっん、ごっほごっつほんああ…あ、ありがとう…んぐっ…

ございますう」

こんなに乱暴にしても丁寧な礼を言うことを欠かせない。ビジネスマナーはちゃんと知んなきゃね。

「おい、化粧が乱れてるぞ。直してこい。あと、この下着をやるからこれに着替えてこい」

そう言って派手なレザーボンテージをわたす。

「はい、ご指摘ありがとうございます。金田さん。金田コーポレーションの社長秘書に恥じないようにお色直しさせていただきます」

そういつて萌夏は着替えてきた。性を否応なく意識させるボンテージ。ベッドの上でオレが肩を抱きながらやさしく語りかけてやる。厳しい指導の後にはちゃんとアメをやらないとな。まあ、そのアメも毒入りなんだが。

「どうだ、オレの会社で働いて半年以上が経ったわけだけど？」

「はい、なんだか生まれ変わった気がします。今まで自分がどんなに甘い世界で行きしてきたのか自覚させられちゃいました。金田さんのご指

導がなかったらとくに私はこのシビアなビジネスフィールドからドロップアウトしてしまっていたと思います」

ジーとボンテージの股間の部分のジッパーを開ける。オレの指導によって剃毛されたみずみずしい肉の割れ目がすでに渴望のラブジュースを垂らしている。順調にマゾ化しているようだ。

「そうだろ。オレは社員思いだからな」

そう言いながらそのマン肉に指を食い込ませる今すぐにもぶち込めそうな穴だった。

「はい。本当に金田さんには感謝しています」

そういつてしなだれかかってくる萌夏。入社したときからどれくらい変わってしまったか本人すら理解していなさそうだ。まっ、理解したところでいまの萌夏なら過去の自分を否定してオレに媚びて会社の備品になることを正当化するんだろうがな。

「じゃあ、今日は萌夏の顔を見ながらレクチャーしてあげようか。ほら、そこでこれから教育される場所を見せてご挨拶しようか」

そう言つてオレのベッドを指差す。海外から直輸入した洒落たデザイン  
のキングサイズベッドだ。うちの会社のカワイイどころはだいたいこ  
のベッドで体液を撒き散らしてきた。

そのベッドの上で。萌夏が≡字開脚する。まだ大学を津業して1年経  
つていないみずみずしい場所がボンテージのセクシーなデザインに彩  
られて卑猥にとろとろ泣いていている。そして彼女はその場でその部分  
をオレにハメられるためにくばあつと指で開いてみせる。

「金田コーポレーション社長秘書の桑原萌夏の社長専用オマンコはも  
う準備完了ですう、金田社長さん♡。我が社のモットーは『イノベーテ  
ィブなソリューションでビジネスに種をまく』ですよ。ラブジュース  
がとろとろゝつてなっちゃんってるオマンコはあ、早く金田さんのホッ  
トなソリューションをぶち込んでほしくてえ我慢できないんですう♡」

エッチの前に折れの会社のモットーを思い出させるのは基本だ。セッ  
クスがカップルの営みではなくて会社の業務の一環だと自覚させるた  
めに。そして萌夏の場合もうひと工夫。

「おいおい、いいのか？お前には旦那がいるんだろ？」

「はああんつ、そんなことは言わないでください。これはあ、お仕事なんですから。金田コーポレーションの実績が増えればあの人も喜ぶしい、そのためには、私が社長のレクチャーを受けるのは仕方がないことなの♡」

とても仕方がないと思っっているようには見えない積極的な口調で、そうせつなそうに言う。まだ、旦那に未練があるようだ。あと少しなのだ、なかなか萌夏は抵抗してくる。まつ、そんなメスを征服するのが楽しいんだがね。オレはそのままゴムを付けて萌夏に襲いかかる。

「ああん、社長さあん」

形式だけ抵抗して押し倒される萌夏。

「そうだ、仕方がないんだ。これはヴァイタルな案件だからな」

そう言って口づけする。すぐに媚びるように萌夏の舌が絡みついてくる。

「んちゅっぷちゅう…ちゅぱっ…そうなんですう…仕方ないのお…じ

ゆるるるるる」

仕方がないと言いながらオレの唾液を積極的に吸い上げる萌夏。知識やテクニックを吸いとりたい『姿勢』を見せるためには積極的になんかものであるとオレの体液は吸い上げるように『指導』しているからそれも当然だ。

そうして抱き合いながら腰を下ろしていく。さり気なく萌夏の手がオレのチンポに添えられ入れやすいように誘導する。ちゃんと気遣いのできるオンナになってきたってわけだ。流石、オレの教育メソッド。

すっかりトロトロに出来上がったマンコにズブズブっとオレのデカチンポがまるで吸い込まれるように落ちていく。

「んんんっはああん…入ってきてますうう…んんっあああん」  
ちよっと前と比べればだいぶ広がったものの、まだ狭くてきつい萌夏のマンコ。オレは潤んだ瞳で見上げる萌夏の目を冷たく見下ろしてやる。彼女の瞳にあるのは依存で、つまりオレの思うとおりになるってことだ。愛情なんて必要ない。オレの会社の社員らしくモノに成り下がったオン

ナの瞳だ。

「かんじるだろ？お前のマンコのキャパシティが広がってるのが。この意味、わかるだろ」

「ふああんん…ハイい！わ、私のパーソナルキャパシティがあ…ああん…金田さんによってええ広げられてますう…ちゅうっチュプ…ちゆるるるる」

そう言つて愛しげに吸い付いてオレの唾液を舌で吸い取つて飲み込む萌夏。

まっ、広がってるのはお前のマンコだけなんだけどな。オレは心のかでせせら笑いながら、腰を振りたくる。せまく吸い付いてくる萌夏の体が全身で少しでもオレを気持ちよくしようと媚びてくる。

「ああんんっあんあんあんっつか、金田さんのおっ、ぶっといおちんちんがああっ…ヒヤあああんんっ、私のおお奥の奥まで責めてるの  
お」

「おいおい、攻められるだけかよ？そんなんでうちの会社の社員やつ



てけると思つてゐるわけ？」

腰を振りながらそう問いたです。萌夏が蕩けきつた顔でクビをいやいやしながら潤んだ瞳でオレの言葉を噛みしめるように答える。喋ろうとするオンナをよがらせて喋らせないのはまじ楽しい。

「あああ、ご、ひやあんん、ご、ふあああんん、ごめんなさいいいい……あああんん。せ、いやあああん、攻められたらああ……あんあんあんあん……攻め返すのがああ……びっひやああん、ビジネスですうう」  
そう言うのとより深くくわえ込もうと萌夏の足がオレの腰にまわされ全身で抱きついてくる。まるで彼女の体と一緒に魂まで預けるように。  
「ああ、そうだ。いいぞ。お前はできる社員だ」

ちなみに今まで萌夏にしる他の秘書たちにしる『彼女』や『妻』などと読んだことは一度もない。『社員』『オンナ』『備品』などがこいつらにとって正しい呼び方だからだ。

「あああんん、うれしいですう」

再びキスの嵐だ。

オレはそのままキスをしつつ腰を振りたくる。ガンガンつと激しく彼女が旦那から与えられた僅かな快樂の欠片まで残さないように、全てオレのチンポで塗り替える。

「あっあっあんあんあんん…ふあああんん…ひゃああんん」

絡みつくマン肉、媚びる萌夏。オレはその唇を吸い、子宮口を押し上げ、萌夏のさしだしてくる快樂の全てを根こそぎに奪い、更にそれ以上をくれてやる。

「あああんん、あんあんんあんん。イッちゃうイッちゃうううう、イッちゃってますううううう」

オレの下で叫ぶ萌夏。始めの頃は声を必死で我慢して絶頂も隠していたような萌夏だったが、おれの『指導』のお陰で今ではそこのズミの上にいい声でなくメスに成り下がった。

「オレはまだイッてないんだぜ。おい！」

「あああんん、ごめんなさいいいい。ひゃああんん、しよ、しよんなに深く突かれたらあああああんん！ダメですう、ダメダメダメえええ」



そう宣言してより深く突っ込む。

「あああああああああんなんなん、ふきやいいでしゅううううううう。壊されてるのおオオオオ」

長い絶叫、全身全霊でオレの胸に抱きついてくる萌夏。そして絶頂し、繋がったまま脱力する。どくどく吐き出されたオレのザーメンの感覚。ほどよい倦怠感。オレの下敷きになってふかふかのキングサイズベツトに埋まっている萌夏。彼女の足は未だにせつなそうにオレの腰にまわされている。

「はあはあはあ：感じたよ、萌夏」

「はあはあはあ：私です」

そう上がった息を整えながら笑い合う。

「髪、染めてくれるよな」

ためらうことなく回答が返ってくる。

「はい、染めさせていただきます」

そのうちタトゥーも入れさせるかな。

第五話…三月 教育の季節（1） 金田視点

クリスマスはもちろん萌夏にサンタコスをさせて接待させて、その後オレのマンションに連れ込んだ。最近では週のうち1、2晩はオレの部屋で泊まっていつている。そして年末年始はもちろん旦那と引き剥がし、オレの出張に付き合わせる。秘書課の女子社員四人を全員連れての海外出張だ。他の秘書課の女子と姫始めの乱交をさせたときはさすがの萌夏も引いたようだったがきちんと教育された先輩に『指導』されてすぐに馴染んでしまった。

ほかにおもしろかったのは萌夏がどこまでいけるのか試したときだ。とある重要な取引先の社長とのミーティングで、ちよつと小芝居をうたせてやった。相手は超大手企業のエロオヤジ、萌夏にはミーティングの前にこの取引の重要性をふかーくいい含めてやって、それからギラギラのキャバ嬢のドレスを渡してやった。さらに、太ももにこっちの契約条

件をマジックで書かせて取引相手の隣に座らせてやった。

ここまでやらせても、もう全然拒否らねーの。もう完全にオレのものになったって確信したね。会社のためにセクハラに耐えられる強い女子社員が増えてオレは嬉しいぜ。あ、もちろんエロオヤジに許してやったのはパイモミまでよ。まだ萌夏は堪能しつくしてないからね。会社のために体を売るのはもうちょい後、オレが飽きてからだしね。

萌夏はもう全然抵抗しなくなり秘書課の女子たちとの付き合いを通じてさらにオレに心酔しているようだった。新年の旅行以来週末は秘書課の女子たちで女子会をしているらしい。オレの書いた自己啓発本をみんなで読みながらお茶をしていると嬉しそうにSNSに書いていた。この前ついに、会社のロゴのタトゥーを入れさせて『ください』と頼んできた。

そんな感じで会社の業績と一緒に、萌夏の精神改造も順調なわけだ。そして今日も大きな取引に付き添わせてやった。オレの横で飾りとして座っているだけなのに一丁前に緊張しやがって。

「どうだった億単位の取引は。ゾクゾクするだろ？」

「緊張してしまつて、クールダウンするのが大変でした…」

「はは、それをエンジョイできるようになれたら一人前だぜ、萌夏」

「頑張ります！」

そう言いながら彼女はオレの方にお尻を向けて短めのスーツのスカートをめくつて下着を見せる。オレに出会わなければ絶対履くことなかったどぎつい金色のテカテカの下着だ。今日の取引のために勝負下着を『自分』で買ってこいと言ったからこれは萌夏が選んだものだろう。全体的に服の好みも清楚なものからエロいものに変わつてきてオレの影響が傍目から見てもわかるようになってきている。

「金田コーポレーション社長秘書桑原萌夏のオマンコで重要取引で滾った社長の熱い肉簿をクールダウンさせてください」

社長のデスクに向かつてケツを突き出し、悩ましげに誘惑する。隣で座っている萌夏のメインの仕事はむしろ取引後のオレのストレス解消だ。柔らかなマン肉を取引のあいだじゅう弱いローターで刺激しておい

て、取引後にすぐにでも『使える』ようにしている。

オレは突き出されたケツを今日のムカつく取引先への憎しみを込めてバチーンとひっぱたく。

「ひゃああん！ありがとうございます！」

そう叫ぶ萌夏。こうするためにこの部屋は防音室なのだ。薄暗い社長室のデスクライトだけつけて、ムードを作る。窓の外には有象無象の町並み。

おれはテカテカの派手な下着をなでながら聞く。

「旦那はサビ残してんのに、萌夏はオレと浮気セックスかよ」

「ああん、金田さんの意地悪。これはコンフィデンシャルな社長のインストラクションなんです。私のマインドを変えてできる社員に変えてくれる重要なミーティングだから仕方がないんですう」

そう媚びた口調でいう萌夏。入社したときはハキハキとしていたあの表情も今ではすっかりオレに媚びるメスの表情に変わってしまった。

「まっ浮気セックスするのも仕方ない…か。萌夏の旦那はサビ残しない



と業務が終わらない無能だからな」

すっかりオレが何を言っても否定しなくなった萌夏にオレはさらにその先を要求する。

「ほら、萌夏。お前も言ってやれ、お前の旦那は無能だって」

ケツをもみ、胸をはだけさせ、これから始まることを強調させながらそう囁く。

「えっ……」

そう衝撃を受けたように言う萌夏。

「おいおい、いつもオレがお前の旦那の真実を教えてやってるってのに、お前はそこから距離を取って信じないでいたろ。そういう主観的なビヘイビアってよくないと思うんだよな。萌夏の旦那なんだから、ちゃんと身内のことは客観的に評価しないとね」

こわばった表情の萌夏にそういう。くちゆりと濡れそぼった割れ目に指を這わせる。

「そ、それは……」

更に口こもる萌夏。

「へー、萌夏は会社より旦那のほうが大事なんだ。せっかくオレがこんなに目をかけてやったのにな」

そう冷たく言い放って距離を取ろうとする。実際にかけたのは目ではなくてザーメンなんだが、萌夏がすがりついてくる。

「か、金田さん。ごめんなさい。私が間違っていました。だから…」

「いや、いいし。結局キミも『できない側』の人間なんだってわかったし。もう帰っていいよ。無駄な感情に縛られて客観的な評価ができない、キミもキミの旦那と同じ人間ってことだろ」

さらにそう言って追い詰めてやる。

「違います！」

そう嘆くように萌夏が言った。

「何が？」

おれは突き放していた手をおろして聞く。

「私は…あの人とは違います」

「言葉はきちんというんだ。何が違うんだ？」

そういつて急かしてやる。思考が俺オレに依存し、会社のためにすべてを捧げてきた彼女にとつてもう拒絶はできない。

「あの人は仕事ができないですが、私はできます」

萌夏は震えている。そして萌夏が震えているのは旦那を裏切ったことに対する罪悪感などではなく、オレに見捨てられることに対する恐怖からだ。

「じゃあ、最後のチャンスをあげよう。キミの客観的な旦那に対する評価をここできかせてくれ」

そういつてもう一度萌夏の体を抱きしめてやる。オレの腕の中で健気にも震えている白い肌。

「ありがとうございます！」

あの人は無能です。サビ残ばかりで旦那としても不能です。私のスキルをアップさせてくれないどころかそこそのレベルで満足することを強要する最低の負け犬です」

そう萌夏が初めて自分の言葉で旦那を罵った。

「合格だ、萌夏。この部屋に残ってオレとのシークレットミーティングを続けていいよ」

「ありがとうございます。」

もう、私、迷いませんから。たっぷり『ご指導』お願いします」

ちゅっと媚びるように口づけしてくる。

「ほら、オマエが口をつけるのはそっちじゃないだろ」

「はい、こっちですよね」

媚びた声で萌夏がそう言っただけでオレの股間を服の上から扱き上げる。かちやかちやとベルトを外し、完全に慣れた手つきでズボンを下ろす。とろんと蕩けた目つきで膨らんだボクサーパンツを見つめると先端にできたシミにチュウっとキスをしてそのまままるでパンツ越しに先走りを感じ上げるように吸い付く。これもオレが指導したマナーだ。そして思う存分越しの男の存在を堪能したあとで萌夏がパンツを下ろす。

「ああん、あの人より大きいおチンポが出てきましたあ」

嬉しそうな黄色い声。さっきまでだいふ脅したから当然か。そこでオレは萌夏の茶色く染められた髪をなでて言う。

「おいおい、『あの人』じゃないだろ。使えない社員を呼ぶときは、『自己満足野郎』だ」

まだ抵抗があるのか一瞬迷う萌夏。おれはプレッシャーをかけるようになでていた手を止めた。すぐにその意味を察した萌夏が懇願するように言う。

「あの最低の自己満足野郎よりも大きいおチンポですう」

「ではゴムを付けさせていただきますね」

そういつて萌夏が下品なショーツの中からゴムを取り出す。愛液に湿った袋を破いて口にくわえるとそれを口でオレのチンポに嬉々として装着させる。ちなみに下着と同じくゴムも自費で買わせている。

「よしよし、じゃあケツをこっちに向ける。ご挨拶は今までの指導を意識してな」

そう頭をなでていつてやる。萌夏はすぐに後ろを向きに、再び下着が

見えるようにスカートを捲り上げて悩ましげに腰をくねらせる。

「はやく、金田コーポレーション社長秘書の自己満足チンポじゃ満足できない淫乱肉袋に金田さんの浮気おチンポを突っ込んで思う存分使い倒してください！我が社のモットーはイノベータータイプなソリユーションでビジネスフィールドに種をまくですう。金田さんのイノベータータイプなおチンポがまちきれないんですう！」

フリフリとオレの与えた丈の短いスワースカートから彼女自身を選んだ派手な下着がオレを誘う。萌夏の変化に満足したオレは彼女のよくくびれた腰をガツとつかむ。

「ああんっ！」

待ちきれないというように漏れる声。

オレは焦らすようにチンポで萌夏のエロショーツをずらすとマン肉の入り口でツンツンする。しとどに湿った女の蜜がオレのチンポの先走りと混じってねちよーっと粘液の橋がかかる。

「ちゃんとヨガ行ってるみたいだな。いい感じに腰回りの形がオレ好

みにくびれてきてるぜ」

「もちろんです。秘書課のみんなと一緒にに行っています。会社のためによりセクシーな体つきになるのは女子社員として当然ですから」

旦那がサビ残をこなしている間にこいつは女子会にフィットネス。まっ、そういう風にオレが誘導したただけだな。仕事なんてできる奴らにやらせりゃあいいんだ。そしてデキル連中にはできないと思ひ込ませといてさらに働かせる。そのプロフィールをかつさらえば楽しく生きられるってもんだ。

オレはそのままオレのためだけに準備された萌夏の肉壺に向かって腰を進める。柔らかいマン肉にオレの肉棒が食い込みずぶずぶと萌夏の中に埋まっていく。

「んあっはっああああ、キタあ、入ってきてますう。金田さんのお：んんんん：お・ち・ん・ぽ！」

「旦那のと比べてどうだあ？」

「あああんん！そ、そんなのお決まっていますう。ひゃああんん！あ、

あんな自己満足野郎のお……んんあっ……ちっちやいペニスじゃあ比べ物にならないんです」

ゆっくりと埋め込まれていくオレのチンポ悩ましげに腰をくねらしながら啜えこんでいく萌夏。ぐっちよりとしめった彼女の秘部がまるで待っていましたとばかりに優しく包み込む。



第六話…三月 教育の季節（2） …金田視点

オレはいっきに彼女の秘部にオレの一物をぶち込みながら彼女の胸に手を伸ばす。

「ひゃああんん！」

「シャツ越しに揉みしだく。ショーツとおそろいのマイクロミニのブラ。始めてみたときから氣にいつていた形の良い胸。それがオレの手の中にある。シャツは胸がもみやすいように薄くて柔らかい生地のもを着せてある。何の疑問も抱かずにオレ好みのシャツを自費で揃える萌夏。

「ああ、いいぞ」

そう言ってボタンを一つ外す。普段から第2ボタンまでは外すように『指導』しているおかげでボタンを一つ外すだけで簡単に胸の中に腕を入れられる。

ゆっくりとしたストロークで腰を振りながら乳首をコリコリ弾く。

「ひゃあんっ！」

ビクンとオレの腕の中で感じて跳ねる萌夏の体。

「萌夏、もつとバストアップしなよ。いい整形外科紹介するからさ」

「ああんんっっ…それってえ、ほ、豊胸ですかあ…んんん」

彼女が内心動揺したのかきゅっとマンコが締まる。それを無視してオレは更に突き上げながら言う。

「ああ、なんか問題あるか。スタイルの維持向上に務めるのは女子社員、つか、オンナとして当然だって教えたよな」

「んんっ…あああ…そ、そうですけどお…」

案外しぶといな。すでにタトウーまで入れてんのに今更何に抵抗してんだか。

「へー、そこで向上心ないわけ。オレの所離れてあの自己満足の低能野郎のところに戻るってわけ？」

そう言ってチンポを浅いところに移動させる。いつでも抜けるんだと

言わんばかりに。

「いやあ、そ、それはいやなお。あの、最低の低能の自己満足野郎のどこなんか絶対戻りたくないです！」

そう言つてマン肉をグイグイ押し付けて少しでもくわえ込もうとする萌夏。

「じゃあ会社のためにシリコン入れてその胸を下品なデカチチに改造しろよ」

「しますう、しますから私を見捨てないでください！お願いしますっ！」

腰をくねらせて切羽詰まつてそう叫ぶ萌夏。

「よしよし、それでこそオレの社員だ」

そういつてぐつと腰を突き上げ。マン肉を掘削する。

「ひゃああんん、か、金田さんのキタああああ！」

嬉しそうにそう叫ぶ萌夏。パンパンつと腰と腰がぶつかり合い限界まで乳首がオレの指の間で勃起する。

「はあんんっあんあんあんあん…ひゃあっつっんんん！」

社長室に響き渡る萌夏の切ない喘ぎ声。オレは彼女を抱きしめながらその耳元で囁いてやる。

「次の夏から萌夏は課長だよ。無能な旦那の部署の」

「あんっ！ひゃあんん…ありがとうごさいましゅうう！」

もう、それつがまわらないほどに感じていることが見て取れる。オレはさらに腰を突き上げて萌夏を責める。

「ほら、もっと感想を聞かせろよ」

「ああんっ！ありがとうごさいましゅうう！んはあっつ、あ、あの下低能をお教育する機会をおくだしやつてえ。ちゃんつと、使えるようにい…ひゃあんん…きよ、教育してみしえましゅううう！」

「プライベートミーティングは続けるからな」

「ひゃああい！も、もちろんでしゅう！か、金田しやんのおチンポ指導なしではあ…あんなんああんんっ、ワークライフバランスがないですう！」

んんんああつ、しゅごししゅごいしゅごいい」

激しくなった腰振りにもうがまんできないというように萌夏が絶叫する。

「ヤバイヤバイヤバイ、イツちゃううイツちゃううイツちゃううううううう！」

萌夏の猥褻な肉が収縮しオレのザーメンをねだる。オレは彼女の胸を強く握りながら、一番奥まで突き上げてそして絶頂する。萌夏の絶頂とオレの絶頂がコンマ2秒で一緒に来る。

「ああああああんんん！」

長く響いた萌夏の下がり超え。力の抜けた彼女の体がオレの腕の中に預けられる。それをギュッとオレは抱きしめる。

「はあはあはあつ…」

ゆっくりと息をオレの腕の中で整えるオレのオンナ。繋がったままの体勢でオレは萌夏を社長のデスクにまるで2人3脚のように連れて行く。動きながらお互いのマンコとチンポが擦れて感じる。硬さを維持

するオレのチンポ。

「はあはあ、じゃあ、課長昇進後の練習のためにプログラムを用意したからな。そっからやっていこうか。ここにメールのドラフトがある。どこ宛か見えるな？」

「あの無能クズ野郎の部署です」

きゅっと彼女のマンコが反応する。まだ内心抵抗があるのかもしれない。もしかしたら自分のパートナーを罵倒することに興奮し初めているのかもしれない。

「そうだ、そこに送る予定の来月度のターゲットが2種類用意してある。1つは普通のやつ。もう1つは今まで誰も達成しなかった超野心的な方をだ。こっちを選んだらあの部署は業務過多でパンクするな。お前の旦那もほぼ家に帰れなくなるってわけだ。次期課長になる萌夏に選ばせてやる」

『旦那もほぼ家に帰れなくなる』というところでグリグリとチンポを押し付けてやる。切なげに揺れる萌夏の腰。そしてちよっと考え込む彼

女。だが、それほど深く考えたようではなかった。ほんの10秒。オレが乳首をクリクリと潰してやれば自分が誰のもののかを思い出したらしい。

「ひゃああん、後者のほうですううう！」

「いいのか、旦那にそんな過労死するようなこと要求しちゃって」

「あんっ！だつてえ、本当のビジネスパーソンならあ常にトップを目指すものでしょ？それに、過労死するとしたらそれはあの人の自己管理不足。無能の証ってことじゃないですかあ♥」

そう言いながらオレに預けられた彼女の体が更に深く快感を貪ろうとする。

「ほら、自分で添付ファイルをつけて送れ」

そう乳首を引っ張りながら命令する。

「ひゃあい！」

そう、気持ちよさそうに萌夏は恍惚の表情で言つてパソコンを淡々と操作する。その彼女の顔には先輩を慕つて入社した頃の彼女の面影はな

く、秘書課の他のメス同様にオレ以外の全てを軽蔑し、それ以外の全てを憎む表情が浮かんでいた。

「はあん、じれつたいい。あの人もこんなところまで邪魔しなくてもいいのに。じゃあ、送りますね」

「ああ、旦那が忙しくて帰宅できなくなったたらオレのマンションに住まないか？秘書課の他の連中みたいに愛人としてさ」

「ああん、それいいですう♥ぜひともお願いしますう」

メールが送信完了したのを見計らって腰を背後から一気に打ち込む。  
「ああんっ♥あの無能と大違いのプロダクティビティあふれるおチンポが入ってますう」

萌夏のデカチチを覆う存分堪能しながらパンパンツとリズムカルに腰を振る。嬉しそうに萌夏の体が揺れて、マンコが収縮を繰り返す。抜き差しする度にラブジュースがヌチャヌチャと音を立てて社長室の床に溢れる。

「どうだ、オレの存在感は？」



そう腰を振りながら聞く。

「あっん、あつ、圧倒的ですう。金田さんのお……んはあんん、パワフルなあおチンポお、リスペクトしてますうう！……ああんん、ふああああんん！」

「旦那と比べてどうだ」

そう再び聞くと更に興奮したのか締め付けがややきつくなる。

「ああんん！そんなのお、ひゃあん、比べられないですうう。比べられないくらい……ひゃあんん、あんあんああん、金田さんのがすごすぎるんですうううう」

「おお、締まってきた。とりあえず一発行くぞ」

「ふあああんん、わ、私もイキそうですう。あああんんしゅごいしゅごいふかいいいい！」

オレの腰の動きに合わせて尻を押し付けてくる萌夏。オレは彼女の奥深くで絶頂した。

「はあんん、使ってくださいってえ、ありがとうございますう」

ちゃんと教育したとおり萌夏がお礼を言う。

「とりあえず、前菜は終わりかな。このあとオレのマンションに行つて秘書課のみんなでお前の旦那の業績評価を決めようぜ」

そう言いながらチンポを抜き出す。

「ああん…」

切なそうに声を上げる萌夏。

「あんなダメチンポの評価なんか最低でいいんです」

旦那の業績評価をあげるために体を許したメスが快楽に溺れて本末転倒なことを言つてやがる。そして彼女はその場でひざまずくと丁寧なオレのチンポからゴムを外すとゴムの口を縛つて自分のマンコの中に入る。オレが教えてやつた緊張しないお守りだ。どこにしようとオレのものだつて自覚を忘れないようにな。

じゆるちゆる…ちゅぱつと萌夏が口でオレのチンポをクリーンアップする事後処理までできてやつと一人前だからな。尿道口までピンクの可愛らしい舌でブラッシングしたあとでハンカチで全て拭き取つてオレ

のお気に入りのお香水をシュツとかける。そして、彼女自信のマンコにも今しがた使用済みゴムをくわえ込んだマンコに同じ香りをふりかける。そして名残惜しそうにオレの下着とズボンを丁寧に引き上げる。

「レクチャーありがとうございます。金田さん♥  
じゃあ行きましょうか！」

そういつて豊胸済みのデカパイをオレに押し付けながらメスの香りを漂わせてエスコートしてくる。すっかりオレの色に染まった桑原萌夏。このあともオレの性奴隷として他のメスたちと穴を並べておねだりするんだろう。そしてそれによって自己満足的なできる〇〇像を自分に投影していく。結局コイツも旦那と同じ自己満足的なメス便器ってわけだ。

あとがき

今回は『染められてしまった嫁、気づかなかった僕。』をお手にとってくださり大変ありがとうございます。サークル活動はリアルの方でごたごたがあったものの皆様のお陰でなんとか継続できていますし、こうして新しいジャンルに一步を踏み出すこともできました。今回の作品が皆様のムスコに響けば幸いです。

今回もアンケートを用意しました。またアンケートにそって後日談をブログに例によって投稿しようと思っていますのでほんの心分ほどのものですので答えていただければ大変ありがたいです。

アンケート URL

<https://creativesurvey.com/ng/reply/cb9ad10192e369896d8008378564/>

ブログ

<http://b.dlsite.net/RG30970/>

また小説の過去作もこの機会に手にとっていたただければこれにまさる喜びはありません。

[http://b.dlsite.net/RG30970/archives/cat\\_465697.html](http://b.dlsite.net/RG30970/archives/cat_465697.html)

それでは今後とも皆さんのムスコと末永くお付き合いできることを祈っています。